

壁画古墳からみた高句麗の宗教

鄭 早 苗

I. 序 論

II. 高句麗の宗教観

1. 中国文化圏と高句麗固有信仰について
2. 高句麗壁画と仏教

I. 序 論

古代韓半島の宗教を考えると、高句麗壁画古墳は重要なモチーフを提供してくれている。中国吉林省集安の高句麗遺跡を見学した時、その壁画の華麗さと不思議な図案に圧倒されながら、非常に宗教性の強い壁画であるという感想を抱いた。即ち文字資料以外の可視的資料として、これらの壁画から高句麗人たちの宗教観の一端が窺い知れるのではないかと思ったのである。高句麗の人々が興亡を繰り返した中国諸王朝との国家間交流だけでなく、その国々に住む人々との自然発生的な交流をしていたことは十分に考えられることである。物の交流だけではなく、技術、知識の交流を通して中国の思想に共鳴したり、時には反発したりすることもあったであろうが、自民族以外の新しい地域文化を紹介する高句麗の知識人達は、ある時は優秀な貿易人として高句麗経済を活性化させたり、或いは当時の高句麗社会における文化的、社会的牽引者としての役割を果たしていた可能性は否定できない。

良し悪しは別にして、現代社会を通してみても新しい文化や思想、高い技術を自己に取り入れようとするのは普遍的な人間の行動である。それらが異民族の手によって開発されたものであっても、受け入れたいと思われたものや文化は伝播するものである。新しいものを導入するときには、各地域固有の文化との摩擦はあったであろうが、長い時間をかけて伝えられ、受け入れられてきた宗教や文化は共同体の利益や秩序を急速に破壊しない限り、相互に許容しあつてきたものと考えられる。

たとえば韓半島の仏教の場合、高句麗小獸林王二（西暦三七二）年に前秦の王苻堅が使者とともに浮屠順道を派遣し、あわせて仏像と経文を送ってきたが、二年後には阿道も高句麗にやつて来て、三七五年に小獸林王が順道のために肖門寺を、阿道のために伊弗蘭寺を建てたという『三国史記』高句麗本紀の「海東佛法之始」と記す記事をもつて、一般的には文字資料としての仏教伝来の初めとされる。異国の宗教である仏教が高句麗人たちの抵抗を受けることなく、小獸林王二年に「海東仏教」が始まったかのように記されているが、実際のところ伝来時期はわからない。高句麗人たちが抵抗なく仏教を受け入れたとすれば、この時期よりかなり以前に高句麗人たちは仏教を導入し、理解していたために抵抗がなかったということなのか、あるいは抵抗勢力の存在があつたとしても記録には残されなかったのか、その理由は今となつては不明である。しかし、高句麗古墳壁画の自由奔放とも見える多様な表現を見れば、四世紀以降の高句麗社会における宗教の多様性を垣間見る思いがするし、そこには抵抗勢力の存在がまるでなかったがごとく感じさせるものがある。

高句麗は紀元前二世紀初めの漢の郡県支配以来、中国の諸文化と接触する機会が韓半島の他の地域より多く、神仙思想や道教思想を始めとする中国諸文化に関する知識は中国とさほどの時間的差異も少なく導入されていたのではあるまいか。特に漢の武帝による四郡設置は中国の中原に近い玄菟郡内の人々に中国文化の知識を豊富にしたであろうし、また楽浪設置からおよそ四〇〇年間にもおよぶ中国諸王朝による平壤地方の支配は、土着地方文化の基盤の上に多様な中

国文化の混合をもたらしたことであろう。その文化の中には当然中国で流行していた仏教、道教も含まれていたはずである。

高句麗では美川王三(三〇二)年に、三万の軍隊で玄菟郡に侵入し八千人の捕虜を平壤に移住させ、さらに十四(三一三年)には楽浪郡を襲って、二千余人を捕虜にした。これでもって中国王朝による楽浪郡支配を終焉させた高句麗であったが、長年にわたる中国諸王朝との関係は高句麗文化を複雑で多様性のあるものにしたであろう。韓半島が漢帝国に支配される以前から、中国では道教、儒教が浸透していたし、後漢時代に入ると道教教団が王朝の命脈を絶たんばかりの勢いであった。これらの歴史的展開に対して、高句麗人たちは自分達の命運と重ねてたえず関心をもって見ていたものと考えられる。四世紀後半の前秦による仏教伝達に対して抵抗が見られなかったのは、中国社会において道教教団の勢力がいったん衰えた時期で仏教に対する評価が高くなっていった時期と重なるという要因が大きかったからかもしれない。当時の前秦は国家として力強い時期であり、その前秦と高句麗との力関係によるものというよりは、高句麗社会の価値観の多様性が原因しているように考えている。なぜなら、その後の高句麗仏教の展開は小獸林王二年から二十年後にすぎない故国壤王九(三九二)年に「下教嵩信佛法求福」(『三国史記』)と、国家が仏教でもって民の福を願うだけでなく、翌年の広開土王二(三九三)年には「創九寺於平壤」(『三国史記』)が建てられるなど、仏教信仰が順調に進んでいたようであるからである。

『三国史記』・『三国遺事』の仏教伝来記事ではどのような仏教が三国に伝えられたのかを具体的に記述している訳ではない。『三国遺事』興法第三「阿道基羅」では新羅における仏教伝来時期に関して、『三国遺事』編者一然が新羅の仏教伝来の時期は訥祇王代(四一七―四五八)でなければならないといい、ついで元魏の釈曇始は阿道、墨胡、難陁のうちの一人を指すのではないかという説を提示したりして、仏教伝来の時期や伝道者についてあれこれ思索しているように、古代三国の仏教伝来は簡略化された記事しか残されていないために隔靴搔痒の感はいたし方がない。しかし、近年では

遺跡の発見などを通して文献資料の不足が補われることも多くなってきたし、また高句麗壁画古墳の絵画の模様から当時の生活状況が少し明らかになってきたように、今後もこの方面の研究成果に期待することが多くなるであろう。かつて、古代韓半島三国の道教に関して『三国史記』における道教関連の可能性のあると考えられる龍、犠牲獣、山川祭祀等のモチーフや、遺物の鼎、釜、鏡、劍、祭壇等を比較することによって古代道教の痕跡を検討したことがあるが、結論として古代三国の道教導入時期は後漢時代にまで遡りうる可能性もあるのではないかと考えた。ここでは高句麗壁画などから高句麗の宗教を考えてみたい。

II. 高句麗の宗教観

1. 中国文化圏と高句麗固有信仰について

高句麗への仏教伝来の時期や内容に関して従来から多角的に考察されてきたが、論点を明確にされている説から見てみたい。田村円澄氏は、『高句麗の仏教伝来について、問題点を整理しよう。第一に、高句麗の小獣林王にとって、仏教は「下賜」されたものであった。したがって、二者択一的に選ぶ余地はなく、ただ受容するほかなかった。これは仏教に限らず、宗主国と臣従国との関係から、おのずと規定されることであるが、ともあれ高句麗の仏教伝来は、前秦側の一方的な意志にもとづくことであった。にもかかわらず、高句麗は前秦にたいし仏教受容に積極的である姿勢を示す必要があった。僧の順道や仏像・經典を迎えた小獣林王が、ただちに苻堅のもとに回謝の使者を遣わしたことに、この辺の事情が示されているといえよう。第二に、高句麗の仏教伝来は国政レベルの問題であった。前秦が高句麗に仏教を伝えたのは、いわば外交政策の一環としてであった。また高句麗が仏教を受容したのは、前秦に対する臣従の意思表示に他ならなかった。(略)第三に、高句麗の小獣林王にとって、仏教受容は内政の問題であった。というのは、小獣林王は高句麗の貴族層が、仏教を受容することについて、苻堅に責任を負う形になっていたからである。』²⁾と述べ、前秦から

の「下賜」という見解をとられる。

また、「下賜」説ではないが、次のような見解もある。五胡十六国のなかで屈指の政治家とみなされていた前秦の王猛が三七〇年に燕国を打ち破った時、故国原王は高句麗に逃げて来た慕容評を捉えて前秦に送り返している。この前秦に対する友好的な対応を高く評価した前秦の苻堅が二年後に当たる三七二年に、高句麗に僧侶や経文を送ってきたのであるという解釈である。当時、前秦は長安に都を立てたことにより、中国大陸の東方を安定させるために高句麗との交流を求めてきたという可能性も考えられる。当時の国際政治力学上から見れば、前秦と高句麗の間における政治的紐帯の可能性を考えることも可能かも知れないが、前秦が高句麗王を冊封したり、いっしょに行動をしたという記録はないので、この可能性は東アジアの力関係を考える上においては参考となるものの、「二者択一的に選ぶ余地」の有無とともに一応保留にしたい。

一方、高句麗仏教の導入に関して鎌田茂雄氏のように三七二年以前の時期を考えるべきという意見もある。『新羅仏教史序説』⁴は、高句麗仏教の流入経路について従来考えられてきた華北——張家口——瀋陽——高句麗王都である国内城のルートではなく、「天山山脈の北側の北道を真っ直ぐ東遷して黄河の大曲折部に至ったと思うのである。(略)涼州から賀蘭山脈の南をかすめて現在の銀州付近へと直行して黄河の流れに出会う。(略)ここまでくれば、雲中、広陵(張家口)と東へ直進すれば遼東半島まで苦もなく着いてしまっわけである」ので、高句麗への仏教の流入は相当早い時代に修正しなければならず、結論として二世紀後半から三世紀始めには伝えられたものと考えておられる。筆者も基本的にこの考え方には賛成である。

中国では二世紀に仏教、儒教、道教三教の相違点や優劣性が議論されるほど三教に対する関心度は高かった。たとえば、後漢時代の牟子⁵は『理惑論』一卷を著して学説を立てたが、その理論は後々まで三教論争の基本的理論として引用されてきたと言われるものである。牟子は三教の融合思想を唱えながらも、三教のうちでは仏教がもっとも優越してい

ると主張する。たとえば、牟子がとなえた三八条からなる本論のうち、第三四条では神仙と不死を信じずに仏教を信じ、第三七条では、道家においては人は死なずに仙になるというが、仏家では人はすべて死すと言い、経伝の史実から見れば道家の説は間違いであると明言するなど、明瞭な理論で仏教の優越性を述べていて、外来宗教である仏教に対して深く傾倒していたことがわかる。

また一方、中国で三教論争が行われている同時期の二世紀には、中国の東西に強力な道教教団が成立していた。東方の太平道と西方の天師道である。太平道の大首領である張角は、神仙思想を説くよりはお札や冷水を飲ませて病気を治すという現実的な手段によって民衆から支持を得て、信者はまたたく間に何十万人にも達し、当時の中国のおよそ三分の二にあたる地域に信者を獲得していたという⁶。太平道は西暦一九四年二月に二八郡において同時に決起し、後漢時代をおおいに揺るがした黄巾の大乱を引き起こすまで道教教団は組織化されていた。黄巾時代最後の首領の一人である張魯は魏王朝の基礎を作った曹操に敗北したが、曹操はこの張魯を高く評価し、鎮南將軍の称号だけでなく侯爵の地位まで授けた。曹操のもとで張魯は主として宗教的实践に関わっていたのであるが、その張魯の息子たちにも侯爵の地位が与えられただけでなく、張魯の娘と自分の子どもとを結婚させて姻戚関係まで結ぶほど、道教に対して寛大性を示したのである。

中国において急速に拡張した道教教団勢力の動向は、高句麗社会にも波及していたものと考えられる。中国の道教教団が黄巾の乱という前代未聞の戦いを後漢王朝に対して挑み、中国の歴史を変えたという情報に驚く暇もなく、その道教教団の首領の一人である張魯を曹操のような実力者が擁護するという、客観的に見れば理解しがたい情勢とその後の道教教団のあり方などに対して、地理的に近い距離にある高句麗地域に住む人々が無関心であったはずはなく、道教に對する賛否両論と関心が人々の話題にのぼったであろうし、またそこには当然情報の錯綜もあったであろう。中国で起こった情報の伝達経路は韓半島西北部からだけでなく、当時の韓半島には楽浪郡などに中国勢力が存在していた時期で

もあるので、中国に関する情報には敏感にならざるをえないだけでなく、高句麗にとって隣国情勢を知ることが必然でもあったと考えられる。高句麗の政府機関は意図的に情報を集めてもいたであろうし、警戒もしていたであろう。しかし、高句麗と陸続きである中国で起こった黄巾の乱のような大反乱勢力が動くとき、人々の移動も活発化するため、流入してくる者からの情報は高句麗の一般人の耳にも届いていたはずである。

道教の発生と韓国の道教思想に関して、車柱環氏は「中国において道教が形式と教理を備えた宗教の一つとしていまだ形成されず、神仙家の方術や黄老思想の域を脱しきれなかった時期、あるいは寓話や説話の中に萌芽的に現れているさらにそれ以前の段階において、すでにわが民族のあいだにはいわゆる道教的な思想表現が出現していたが、これをどのように扱うかという問題である」という問題提起をされている。「いわゆる道教的な思想表現」とはおそらく道教と似通う高句麗の固有信仰を指して述べておられるものと考えられる。『三国志』・『後漢書』両書の東夷伝・高句麗条には表現は若干異なるが、「十月祭天」を「東盟」といい、国の東に大穴があり十月に「禪神」を迎えて祭ると記載されている。この行事に関して「わが民族が古来から天を崇め敬ってきたことに由来する祭礼だといえる。このような敬天行事を道教のそれと同一視することはできないが、始祖を天帝の子孫だと信じた高句麗人たちの思考と関連づけて考えてみる時、天を統括する天帝ないしは上帝を信奉する道教的な立場と類似点のあることを感じさせる」と、高句麗固有信仰と道教の関連性を指摘されるが、この問題と関連して、かつて李能和氏が朝鮮で始まって中国に伝播していたと主張された。李能和論に対して車柱環氏は「古来において、中国東北部およびその地続きの朝鮮半島北部の山岳地方を舞台にして、神仙方術が発生したということは十分にありえることである。神仙思想の震源地が中国ではなく海東の地であったと断定しうる科学的証拠を提出することはできないが、このような考えが出て来たについてはそれなりの根拠があったことを否定できない」と、李説を否定されているわけではない。

筆者も李説に関心をもつ者の一人である。古朝鮮時代がいつから始まり、その領域が従来いわれてきたような韓半島

西北地域に限定されるのではなく、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の学会が主張するように遼河流域にまで及ぶのかどうかの問題はともかく、たとえ伝承としても、『史記』・『漢書』に記された殷の貴族であった箕子が殷の滅亡を契機にして亡命し、韓半島西北部で国を建設したと中国史書は記載する。その後燕王が漢にそむいて匈奴に逃亡したため、燕王の部将であった衛満も同千人とともに東方へ逃れ、箕子朝鮮の勢力圏にやって来た。そして箕子朝鮮最後の準王の信任を受けたにもかかわらず、その後勢力を蓄えた衛満が準王を追放して自らが王となって衛氏朝鮮を建てたとする。これらの記録は韓半島と中国諸王朝との密接な関係を表現しているだけでなく、韓半島と中国との関わりが遅くとも殷末からであった可能性も示唆していることは確実である。『史記』によれば、衛満が逃亡してきた時には蕃夷の風習にあわせて魋結（さいづちまげ）し、蕃夷の服も着ていたというから、「蕃夷と称せられた」韓半島の人々の風習は、漢や燕などとは異なる独特な文化圏を形成していたことが推定できる。つまり、中国文化圏と異なる文化圏が韓半島にあっただけでなく、衛満が亡命するためには、その地域の風習を取り込まざるをえなくなるほどの一定の勢力が存在していたものと考えられる。この地域の文化圏が中国文化圏と違和感がなく、中国文化と比較して一定の評価も受け、亡命先として適当な地域と認識されていたとも考えられる。また、この地域の固有信仰が中国の信仰形態と近似する、李能和説で言う神仙方術に近いものであったという共通性があったのであろう。

個人救済思考の側面が強い道教が不老不死の神仙思想に繋がる場合は多く、山岳の豊富な韓半島で、自然畏怖の思考と個人救済を基本とする神仙思想が中国に先んじて始まったか否かの問題よりも、中国の固有信仰と似た信仰形態が韓半島にあった可能性は考えられる。しかし、そうであったとしても文献的には神仙思想韓半島発生説の立証こそ難しい問題となる。『三国遺事』紀異第一「辰韓」では「後漢書云。辰韓耆老自言。秦之亡人來適韓國。而馬韓割東界地以與之。相呼徒。類似秦語。故或名秦韓（略）又崔致遠云。辰韓本燕人避之者」、つまり辰韓の老人が語るに、秦の亡命者が韓国の地にたどり着いたので、馬韓では彼らのために東方の地を分け与えただけでなく、崔致遠の説によれば辰韓は燕

人たちが亡命してきた所であると記している。この記事が新羅末期の文人崔致遠のどの書物から引用した記事であるのかは不明だが、韓半島内に早い時期から秦や燕の人々が住みついてきたという認識を新羅人たちがしていたということが分かる。中国大陸の興亡と連動して異民族の流入が常であった韓半島において、中国と接する地域では領域の確定も流動的であったため、韓半島から近い中国諸民族文化と韓半島地域の固有文化との境界線は複雑に錯綜していたであろうから、この地域で発生したと考えられる文化現象は民族別に区分できないようである。言葉を変えれば、この地域で生まれたと考えられる宗教や風俗の担い手の確定は困難であるが、複合地域でもあるということである。

普通、高句麗へ道教が伝わったのは『三国史記』高句麗本紀

・(榮留王) 七年春二月。王遣使如唐請班曆。遣刑部尚書沈叔安。策王爲上柱國遼東郡公高句麗國王。命道士以天尊像及道法往。爲之講老子。王及國人聽之。

・(榮留王) 八年。王遣人入唐。求學佛老教法。帝許之。

と、『三国遺事』卷三「寶藏奉老 普德移庵」の

・高麗本紀云。麗季武德、貞觀間。國人爭奉五斗米教。唐高祖聞之。遣道士送天尊像。來講道德經。王與國人聽之。即第二十七代榮留王即位七年、武德七年甲申也。明年遣使往唐。

の記事をもって、榮留王七年、即ち西暦六二四年ないし、武徳・貞觀年間(六一八―六四九年)に道教が唐から入ってきたとする。上記したように、高句麗への道教の導入は遅くとも後漢時代の黄巾の乱が起こった頃にはすでに入ってきたものと考えているが、実証できうる資料は今のところ見出せない。しかし、「後漢の末ごろになると、形式主義に流れ、偽善的な傾向さえあらわれた。そのうえ、末梢的な礼法や経書の字句そのものにとくにこだわるようになった」とされる時代において、形式的でなく個人救済の要素を強くもち、道教的要素によって病気が平癒したという噂が広まれば、道教に惹かれていく人々は決して少ない教ではなかったであろう。

遼東半島から高句麗地域で起こってきた人的交流、文化的交流、宗教的交流などは、文字資料で表現されるよりもはるかに古いことであったとみなされるが、そのことが高句麗壁画古墳絵画のモチーフに表現されているのではないかと考えている。

2. 高句麗壁画と仏教

高句麗壁画古墳のなかから、まず集安の五盛墳4号墓、五盛墳5号墓、長川1号墳、舞踊塚、角抵塚等の絵画を取り上げ高句麗の宗教性を見てみたい。集安には多くの壁画古墳が存在し、それぞれ個性的な絵画が描かれているが、古墳という性格上当然、絵画のモチーフには宗教的な要素が多様に表現されているものが多い。古墳壁画の宗教的なモチーフはそれ自身が被葬者やその家族、親族の宗教観を表現したものであるから、文字資料に恵まれていない高句麗の宗教を考察する上において貴重な資料を提供してくれているはずである。

それぞれの古墳の編年に関しては全虎兌氏の『高句麗古墳壁画研究』¹¹を参考にする。ここでは筆者全氏の試案だけでなく韓国、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)、中国、日本の研究者による既存の編年案が記されている。五盛墳4号墓は筆者全氏の試案では六世紀前半で、他の諸国の研究者による編年案は六世紀初から七世紀前半、五盛墳5号墓は全氏の試案が六世紀後半で、他の編年案は五世紀半ばから七世紀前半、長川1号墳は全氏の試案が五世紀半ばで、他の編年案は四世紀半ばから五世紀後半、舞踊塚は全氏の試案が五世紀半ばで、他の編年案は三世紀半ばから六世紀初め、角抵塚は全氏の試案が五世紀初め、他の編年案が三世紀半ばから六世紀初めと、研究者による年代幅がある。編年幅の差が小さくておよそ一〇〇年、大きくておよそ二五〇年ということになる。

研究者による編年試案が現状ではこのように異なっているが、古墳は個人的なもので、描かれた絵画のモチーフは個人や一族の宗教的願望が表現されたものとみなされるため、同地域の同時代人が同じ宗教を信仰していたり、同じ価値

観をもつていたとは限らないのは当然のことである。また、死後観は個人の宗教的な個性が反映されるであろうから、古墳ごとに絵画のモチーフが異なるのは当然である。高句麗における宗教弾圧資料は見出せないのも、高句麗人は自分が所属する共同体の意志、あるいは個人の意思で宗教を選択していたものと考えられる。おそらく埋葬者各自の宗教は所属する共同体の宗教との関連性や世代間の意識変化、さらに各自の社会的環境や地位が絵画に反映されているはずであるから、上記の編年差程度なら各壁画のモチーフの時間的なズレはより正確な時代考証の資料にはなりにくくても、宗教性については貴重な資料であることは間違いない。

上記の五基の古墳は集安という比較的狭い地域内であっても、集安は高句麗の首都であり先進地域であったためか、画題はそれぞれがユニークで豪華な色彩を施したものが多く、総体的に多く描かれているのは、龍や仙人、仙女、太陽神、月神、相撲図、星辰図、蓮の模様などで実に多彩に描かれているが、まずほとんど共通して描かれている蓮華について考えてみたい。蓮華の模様が仏教と関係することは普通に知られていることであるが、高句麗壁画古墳には上記以外の壁画古墳にも多種多様な蓮華が描かれている。蓮華に関して韓普光氏は『新羅浄土思想の研究』¹²で、東晋の高僧支遁道林の阿弥陀信仰と関連する『広弘明集』巻第十五「支道林」条の弥陀佛像讚文のなかで、「彼は仏経を引用し、極楽の名は安養なり、その国には王制と斑爵の序なく仏を君となし、三乗を教となす、男女おのおの蓮花の中に化育し」と浄土信仰との関連性として蓮花の中の男女を引用されるが、長川1号墳にはまさに「男女おのおの蓮花の中に化育」する画が数箇所に描かれているのである。また、高句麗壁画古墳と蓮に関しては、安輝濬氏が長川1号墳の仏教的色彩の豊富さを表現するものとして蓮花をとりあげられている『集安高句麗壁画』¹³だけでなく、全虎兌氏は前記『高句麗壁画研究』の「高句麗壁画と前世的来世観」の章で九〇ページにもわたって詳細に蓮の模様の考察をされている。全氏がこの書で「本来、蓮華は仏教成立以前からエジプト、インド、中国などで多くの意味をこめられてきた」と述べられるように、蓮は仏教に用いられるだけでなく、道教でも用いられているので、蓮華の模様が描かれているからといって単

純に仏教と関連づけられない場合もあることに留意しなければならない。

上記五基の壁画古墳に描かれた蓮の模様は、蓮華座、蓮華唐草、蓮華のつぼみ、蓮華の実、蓮華化生、上から見た蓮華、横から見た蓮華等、多様な蓮華の模様が描かれ、描かれている絵の位置も天井、壁面、側面、柱と様々な位置に配置されている。全虎兌氏は蓮のデザインを集安系列、平壤系列に分けられるだけでなく、形態や位置、デザインの分析など詳細に考察されているが、全氏は蓮の模様の中でもまず、化生の主体としての蓮に注目されている。全氏は注記で「蓮花化生がかなえられる浄土に対してこの時期の高句麗人の認識がどの程度の水準であったかは疑問である。古墳壁画上では輪廻転生の一つの場所としての天界と、それを脱した世界としての浄土が混同されている例があるだけでなく、五世紀まで高句麗における一般的な仏教理解水準も両者を区別して認識する程度まで到達していたとは考えられない」¹⁵と断られながら、五世紀の高句麗において死者の墳墓にまで仏教の化生概念が理解されていた点を表現する資料として、重要な意味をもつ資料であるという評価もしておられる¹⁶。同時に、全氏は化生蓮華の存在とともに注意をひくものとして蓮華裝飾壁画古墳に注目される。長川1号墳をはじめとして五世紀（この編年は全虎兌氏の試案に基づくものである）中葉の集安地域には多数の蓮華裝飾壁画古墳が出現しているが、「このような現象は死者の浄土化生所望と深く関わるものと解釈される。蓮華を浄土世界の象徴と理解する思考は化生の主体としての蓮華認識と脈を同じくするものとして、化生蓮華認識が深化・発展した結果だといえよう」¹⁷と述べ、五世紀頃の高句麗仏教の広がりとして理解が相当程度に進んでいたものと解釈されるようである。

最近では門田誠一氏が集安の高句麗壁画古墳や徳興里古墳の絵画を分析され、長川1号墳の蓮華化生や樹木図などを通して、高句麗における初期仏教は阿弥陀信仰が存在し、高句麗王が関与していた可能性を論じられている¹⁸。鎌田氏は¹⁹ 苻堅によって長安に行った道安が、衆生を救う未来仏として弥勒化生信仰を願ったと論じられるとともに、東アジアへは弥勒信仰と阿弥陀信仰はほぼ同時に浸透したのではないかと記述されながら、民衆レベルの信仰では、兜率天に往生

したいという弥勒信仰と、西方浄土に往生したいと願う弥陀信仰が混同されていた可能性を指摘される。初期高句麗仏教が道安の弥勒信仰に影響を受けていたのか、あるいは道安は儒学や陰陽思想にも関心をもっていたと言われるので、中国の山東半島から距離的に近く、道教の影響を十分受けていたと考えられる高句麗への仏教伝達は、道教的な解釈を交えたものであったのか、否かにも関心が向く。しかし、この問題は今後の課題である。

高句麗への仏教導入時期について、公式伝来としては小獸林王二(三七二)年になっているが、一般国民はもっと早く受け入れていたのではないかとみなされる文献資料として『梁高僧伝』巻四の「竺潜記」と『出三藏集記』巻十二の「高句麗道人書支道林」条には、東晋僧の支遁(三一四―三六六)が高句麗に信書を送ったと記してあるところから、支遁入寂の年にあたる故国原王三六(三六六)年以前に、高句麗では仏教を理解、もしくは信奉していた人がいたようであると、前記の韓普光氏が述べられる。文献的に高句麗仏教の上限がたどりうる時期は韓氏説に説得力があると考えられるが、前記のように筆者としては鎌田茂雄氏とはほぼ同時期ぐらい、つまり、二世紀後半から三世紀初め頃には高句麗に仏教が到達していた可能性もあると考えている。その抛り所の有力な手がかりが高句麗壁画古墳のモチーフではないかと思われる。しかし、壁画編年の定まっていない現状では、文献的にたどりえる時期を高句麗仏教導入時期とするのが適切であろうとも考える。

上記五基の高句麗壁画古墳は建造時期が比較的近く、壁画の画題も共通するものが多く、同一地域にある壁画古墳群ではあるが、古墳は個性的な性格をもつものであるため、当然各古墳の絵画のモチーフは異なっている。高句麗では壁画古墳が豊富に残されてきたので、高句麗人の宗教を考察するにあたって、壁画古墳は文字資料以外の格好の資料になるはずである。将来、壁画古墳の編年が確定されれば、重層する高句麗社会の宗教の編年と中国文化伝播経路や、高句麗社会の思想性もかなり把握できるであろうが、この問題は将来の研究成果を期待するとして、さらに5基の壁画古墳のモチーフを簡単に見ていきたい。

五盛墳4号墓墳では、四神図、太陽を頭に抱いた太陽神と月を頭に抱いた月神が向かい合って天をかける図、足の長い龍や絡み付く龍の図、牛頭の農業神、冶金をする人物像、車輪を転がす人物像、黒鳥に乗る人物像、蓮坐に立つ男女人物像、円の中に描かれた烏の太陽神と円の中に蛙を描いた月神などの模様などが多様に描かれている。全体的な印象とすれば、仏教の影響というよりはむしろ神仙思想、もしくは道教の影響を受けたモチーフが多いと考えられる。蓮座に立つ男女の人物像では男子は帽子をかぶり、女子は扇を持っているので、蓮座に立つ人物が菩薩や釈迦であると言いがたく、仏教とは関連づけにくいと考えられる。もう一人の蓮座に座って右足を立てている人物の頭が剃ってあるように見えるので、『集安高句麗古墳壁画』²¹の説明文では「僧侶の頭の形」としているが、この人物の髪型は同じ壁画に描かれている太陽神の髪型とも似ているので、僧侶であるとも言いがたい。難いようである。

五盛墳5号墓の壁画のモチーフにも龍をはじめとする四神図、からみつく龍、朱雀、横に並んで描かれた蓮の模様、4号墓と同じように太陽を頭の上に抱いた太陽神と月を頭の上に抱いた月神、牛頭の農業神、飛天などが描かれている。4号墓の太陽神、月神、農業神の衣服の色彩は赤色、黄色、白色などが使われてカラフルであるが、5号墓のこれら3神の衣服はともに白色であるところが異なる点であるが、全体として4号墓とよく似た絵画のモチーフが使われ、仏教色はあまり見られず、飛天などのモチーフは来世を託しているというよりは、神仙思想の影響とみなす方が妥当と考えられる。

長川1号墳はモチーフが実に多彩である。トランプのダイヤカード模様のような上着を着て列をなして立っている人物達や、列をなして踊っているように見える男女の人物像、供を連れている人物像など、各層の人物が描かれていて、当時の風俗や服飾を知る上でも貴重な資料と考えられる。また、それら多くの人物像の間には蓮のつぼみが多数描かれるだけでなく、蓮華化生のかわいい男女の図、蓮座に立って並んでいる人物像、さらに蓮座上の人物像の中には菩薩像か釈迦像と見られる図、空を飛ぶ飛天には光背が描かれるなど、仏教的な要素を多分に含んだ絵画が描かれているのが、

この長川1号墳の顕著な特徴と考えられる。しかし、一方ではからみつく龍、天井を支える力士達、空を駆ける珍獣たち、天井に描かれた太陽と月に向かい合って描かれている二つの北斗七星図など、仏教と直接的に関連するモチーフというよりは、むしろ五盛墳4、5墓のように道教思想を基準にして描かれたと考えられるモチーフも多く、被葬者、あるいは被葬者一族の宗教の重層性を窺い知る思いもする。可能性としてこの古墳の被葬者は仏教信徒であったかもしれないが、墳墓築造に当たっては当時の古墳建築様式や、壁画様式も取り入れたのかもしれない。

舞踊塚も実に多彩な壁画古墳である。名前の由来になった、男女がカラフルな模様の衣服を身につけて列をなして舞踊をしている図、馬に乗り弓をつがえながら獲物を狙って狩猟をする男性達と走る虎などがデフォルメされず写実的かつ躍動的に描かれている。またこの古墳にも、馬上の人物、帽子をかぶり豪華な身なりで台の上に座る人物など多くの人物像が描かれている。長川1号墳で見られるような牛車、ニワトリ、多様にデザインされた蓮の模様、琴を演奏する女性たち、飛天、朱雀、大きなカエルを描いた月、空駆ける馬、相撲図も描かれているが、特徴的なのは屋根の上に蓮のつぼみをのせたような建物から運び出されているのではないかと思われる、食事を運ぶ人物像である。この壁画古墳は長川1号墳と同様に多彩なモチーフが描かれていることでは共通するが、仏教的な要素と言う点では蓮が描かれている以外、あまり見出せないようである。

角抵塚はその名の由来のように力強い相撲図が特徴である。この古墳にも長川1号墳で見られた蓮のつぼみを屋根にのせたような家と蓮華も描かれている。木の模様は上記壁画古墳にも描かれているが、この壁画には相撲を取る力士のそばの大きな木の枝に鳥に似た黒い鳥が何羽も止まっているのが特徴的である。長川1号墳のデザインに似る牛車もあり、馬もいるが、珍しいのは番犬ではないかと考えられる首輪をつけた犬が登場していることである。また、頑丈で立派な柱を備えた家の中では、主人公と見られる人物や従者と見られる人物なども描かれている。円の中に三本足のカラスを描いた太陽図は、他の壁画古墳のデザインと共通するが、まるい円が描かれずにカラスだけが描かれている図もあ

る。全体的にこの壁画古墳は仏教的色彩よりは多神教的な意味では道教的な影響を強く感じさせる内容である。

以上、簡単に壁画古墳のモチーフを通して集安高句麗時代の仏教がどの程度見出しえるのかを簡単に見てきたが、長川1号墳のように仏教的色彩をもつ古墳もあるが、仏教の影響よりは全般的に道教的色彩が強く残されているようである。神仙思想を含む道教思想は具体的に現実的なモチーフを有するが、集安時代の高句麗仏教がどの程度その教理を知りえていたのかが不確かである今日、仏教信徒が墳墓の中に仏教的死後観を描きえたかどうかの問題も含めてさらに多角的に検討を要する問題であることを痛感する。

注

- 1 「古代韓半島三国の道教——その時期とモチーフ——」(『大谷大学研究年報』第五十一集)
- 2 田村円澄著『古代朝鮮仏教と日本仏教』(吉川弘文館 一九八〇年六月一日発行 一九九二年一月一〇日第4刷) 七―八頁。
- 3 東潮・田中俊明著『高句麗の歴史と遺跡』(中央公論社 一九九五年四月一五日発行) 三二―三三頁。
- 4 鎌田茂雄著(大蔵出版株式会社 一九九八年二月二六日発行) 六一―八頁。
- 5 牟子に関しては諸説があるが、久保田量遠著『支那儒道仏交渉史』(大東出版社 一九四五年二月二〇日発行)では、詳細な検討の結果、牟子は後漢時代の人物とされた。
- 6 アンリ・マスペロ著『道教』(平凡社 二〇〇〇年一月一五日発行) 二〇八頁。
- 7 『朝鮮の道教』(三浦国雄・野崎充彦訳 人文書院 一九九〇年六月二〇日発行) 一六頁。
- 8 注7と同じ 一七二―一七三頁。
- 9 注8と同じ 九三頁。
- 10 窪徳忠著『道教史』(山川出版社 一九七七年八月五日発行) 一三一頁。
- 11 ソウル 四季節出版社 二〇〇〇年五月八日発行 四一七頁。
- 12 東方出版 一九九一年六月二五日発行 一一―一二頁。

- 13 ソウル 朝鮮日報社 一九九三年一月二五日発行 二九頁。
- 14 注11と同じ 一四一頁。
- 15 注11と同じ 四四一頁。
- 16 注11と同じ 二二二頁。
- 17 注11と同じ 三二二―三二三頁。
- 18 門田誠一著『銘文の検討による高句麗初期仏教の実相―徳興里古墳墨書中の仏教語彙を中心に―』（『朝鮮學報』第一八〇輯 二〇〇一年七月二六日発行 朝鮮学会）、「高句麗の初期仏教における經典と信仰の実態―古墳壁画と墨書の分析」、『朝鮮史研究会論文集』No. 39 二〇〇一年一〇月三〇日発行 朝鮮史研究会。
- 19 注4と同じ 四四―四五頁。
- 20 注12と同じ 九一―一〇頁。
- 21 注13と同じ 六七頁。